



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.116

2013.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 -

塚本師也

第7回

阿玉台式土器の細分(1)

既に述べたように、西村正衛による隆帯脇の押引文を基準とした阿玉台式土器の細分が、現在最も広く普及している。これから、細分された各型式の特徴を記す。

〈阿玉台Ia式土器〉

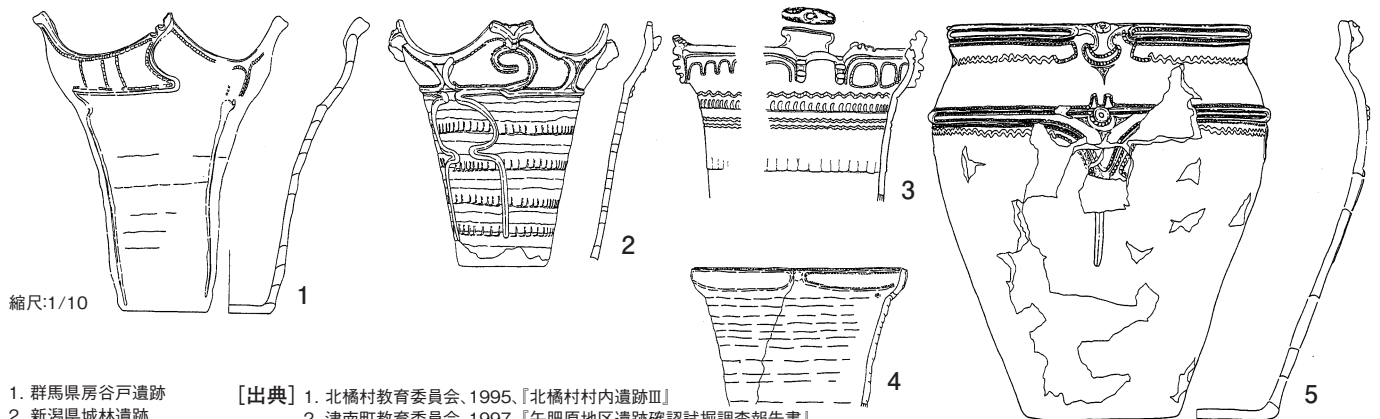
白井雷貝塚で、貝層中の五領ケ台式土器より、上層から出土する傾向のあった、隆帯に単列の角押文が沿う阿玉台式初頭の土器は、阿玉台貝塚Aトレンチと木之内明神貝塚Aトレンチ第一純貝層より下位の層では、五領ケ台式を伴わずに出土した。よって、五領ケ台式より新しいことが確定した。木之内明神貝塚Aトレンチでは、上層の第一純貝層から、同様に単列の角押文を施すが、前述した阿玉台式初頭の土器とは区別される特徴の土器が出土した。そこで、単列の角押文が沿う阿玉台式のI類を、a種とb種に区分した。

阿玉台Ia式土器(第I類a種)には、波状口縁の土器と平縁の土器がある。波状口縁の土器は、五領ケ台式の系譜を引き、頂部が尖るものと平坦なものがある。頂部が尖るものは、片側に二つのキザミを加え、頂部から弧状の隆帯を垂下させ、その下端から横位の隆帯を伸ばす。この位置から体部に隆帯を垂下させる(第3図1)。頂部が平坦なものは、波頂部に刻み目を加え、以下渦巻状の隆帯等を垂下させる。この渦巻文下端附近に横位の隆帯を配し、そこから体部に隆帯を垂下させる(第3図2)。平縁の土器は、口縁部に粗型的な区画文を配す。区画文は、阿玉台Ib式以降のものとは比べると幅狭で、区画内に単独で角押文を施すものはみられない(第3図4・5)。区画の接点部分に、粘土棒を芯としてこれを粘土帯で囲った突起もしくはV字状の突起を二つ並べて配した

ものがある(第3図3)。これが上方にせり上がって、阿玉台Ib・II式に盛行する扇状把手となる。この他無文の深鉢形土器もある。

阿玉台式土器は、口縁部区画文、頸部素文帯、体部懸垂文を特徴とするが。その確立は阿玉台Ib式期で、阿玉台Ia式では、頸部素文帯が不明瞭なものが多い。文様を左右非対称にすること、口縁部内面に彫刻的な文様を付けることなどの特徴もみられる。この時期のヒダ状圧痕は、間隔を開けずに、輪積みした粘土帯すべてに対して押捺している。

阿玉台Ia式土器は、西村の調査事例以降出土例に恵まれず、一時はその存在すら疑問視された。現在では資料数も増え、千葉県寒風台遺跡第4号土壌、茨城県宮後遺跡SI-247、同遺跡SK-396、栃木県仲内SK-112などで一括資料が確認されている。



縮尺:1/10

1. 群馬県房谷戸遺跡
2. 新潟県城林遺跡
3. 福島県法正尻遺跡
4. 千葉県加茂遺跡
5. 栃木県仲内遺跡

- 【出典】
1. 北橋村教育委員会、1995、『北橋村内遺跡Ⅲ』
 2. 津南町教育委員会、1997、『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』
 3. 福島県教育委員会、1991、『東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』
 4. 小林謙一、1996、『加茂遺跡出土の縄文時代中期土器』『民族考古』第3号
 5. 栃木県教育委員会、2006、『仲内遺跡』

【参考文献】

- 塚本師也、1990、『坊山遺跡出土の阿玉台Ia式土器(後編)』『栃木県考古学会誌』12集、栃木県考古学会
 西村正衛、1955、『千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第二・三次調査)』『早稲田大学教育学部学術研究』第3号
 西村正衛、1969、『千葉県小見川町木之内明神貝塚-東部関東における縄文中・後期文化の研究-其の一』『早稲田大学教育学部学術研究』第18号
 西村正衛、1970、『千葉県小見川町阿玉台貝塚-東部関東における縄文中・後期文化の研究-其の二』『早稲田大学教育学部学術研究』第19号
 西村正衛、1972、『阿玉台式土器編年の研究の概要-利根川下流域を中心として-』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

- | | | | | | |
|----------|-------------------|---------|----------|-----------------------|---------|
| ■阿玉台式土器 | 阿玉台式土器の細分(1) | 塚本師也 …1 | ■リレーエッセイ | マイ・フェイバレット・サイト(第109回) | 森下真企 …2 |
| ■考古学の履歴書 | 良き師・良き友に恵まれて(第9回) | 渡辺 誠 …2 | ■考古学者の書棚 | 『狐闇』 | 植木智子 …4 |

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(第9回)

渡辺 誠

10. 他大学の先生方と学友達

九州勢との関係は少し先延ばしして、東京での友人達について述べる。慶応にはあれだけ全国的に活躍される江坂先生がおられるにもかかわらず、そのまねをして、資料をもとめて各地に出かける学生はあまりいなかった。当然話し相手も少なく他大学にも出かけていった。先にも述べたが、高校の同級生だった鈴木君を訪ねて明治大学にはよくいった。あわせて神田の古本屋歩きも多かった。

次に多かったのは国学院大学であった。ここでは小林達雄氏をはじめ多くの縄文や旧石器に闘心の深い人々がいた。はじめ世田谷の千歳船橋に下宿していたので、国学院のある渋谷で、慶応のある田町まで、ここで山手線かバスに乗り換えていたため、行きやすいこともあった。そのうちに立正大学の関俊彦氏とも話し合い、道玄坂の坂上にある喫茶店「アカデミー」で集まりをもつようになった。水曜会と名付けたが、何曜日にも会っても水曜会だった。

そのメンバーは、言うまでもなく小林門下の国学院勢が多かった。安孫子昭二・可児通宏・富樫泰時・金子拓男・小嶋俊彰氏等々がいた。時には年長の栗原文蔵氏も加わり、楽しい集まりであったばかりでなく、これらの諸君からは今に至るまで各地の情報を頂き、ありがたいことである。この時のメンバーではないが、鈴木克彦・熊谷常正・小野美代子・瓦吹堅・石橋美和子氏等の国学院勢には、今でもお世話になることが多い。

そしてお二人の先生のことを忘れるわけにはいかない。まず大場磐雄先生であるが、特に静岡県富士宮市千居遺跡の発掘では宿舍も同じで、配石遺構や祭祀遺跡などについて御教示頂いたのはありがたいことであった。この発掘の時のシンポジウムの記録が、未だに刊行されていないのは残念である。この遺跡は富士山を望み、そのことが重要な立地条件であるが、先生方のなかには単なる偶然として、高く評価しない方もいた。筆者は副団長として、富士信仰をもつ創価学会の本山・大石寺の裏にあることも重く受け止めていたので、誤った実証主義は縄文研究の障害になるのではないかと思ったし、

今でもそう思っている。

その時ある著名な先生の話をして、そういう時代だったのだと深く心に残った。その先生は親友で、家に来てくれることは嬉しいが、その後すぐに警官がきて、何の話をしたのかなどとしつこく聞かれ、困ったという。しかもその某先生のお弟子さん達は、そういうことはまったく知らないのであり、師の目指した学問の方向性はまったく理解されていないと思われる。

また樋口清之先生からは、京都に勤めてから後のことであるが、ある時小田原城の瓦を見せて頂いた。これには河州私部御瓦師甚兵衛という刻印があった。そして城主の大久保は三河以来の譜代大名だから、さすが三河から瓦を運んでいると話された。しかし河州は河内で私部村は大久保の飛び地であり、現地には同じ瓦があることをお話したところ、そういうことならばその資料紹介を書きなさいと言われた。この約束は未だに果たしておらず、申し訳なく思っている。ただこの瓦は幕末の黒船来航に備えて、相模湾沿岸の城の修復が行なわれたことと関係があると言われ、さすが樋口先生、なんでも良く御存じだなあと感心したものである。遺物の背後にある歴史を調べなさいと教えて下さったのである。蛇足ながら、三河は三州であり、三州吉良の仁吉が有名である。

五反田にある立正大学にもよく参上した。当時は久保常晴先生もご健在で、若くして著名な助手の坂詰秀一先生もおられた。仏教考古学の大家ではあるが、縄文人の埋葬も研究されていて、江坂先生のご紹介で教えを求めて参上したのである。学生の関俊彦・村田文夫氏は水曜会のメンバーであったが、この頃大森に引越したところ関君の家に近く、より親しくなった。時には夕食も頂いたりして、ご家族に優しくして頂いたのは忘れえぬ思い出である。

略歴	
昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 109

塩原城跡 ～ 沖縄県久米島町

森下 真企

久米島は那覇の西方約90kmに位置する、東西約11km、南北約12km、周囲約48kmの起伏に富んだ島です。

塩原城跡は久米島の南西部、銭田の塩原ムイとよばれる標高123.7mの台形状の山頂に位置します。塩原城跡の北側と東側は中腹まで断崖になっており、裾部にかけて比較的なだらかな地形が続き、南側は阿良岳近辺を源流とする塩原川

が流れています。

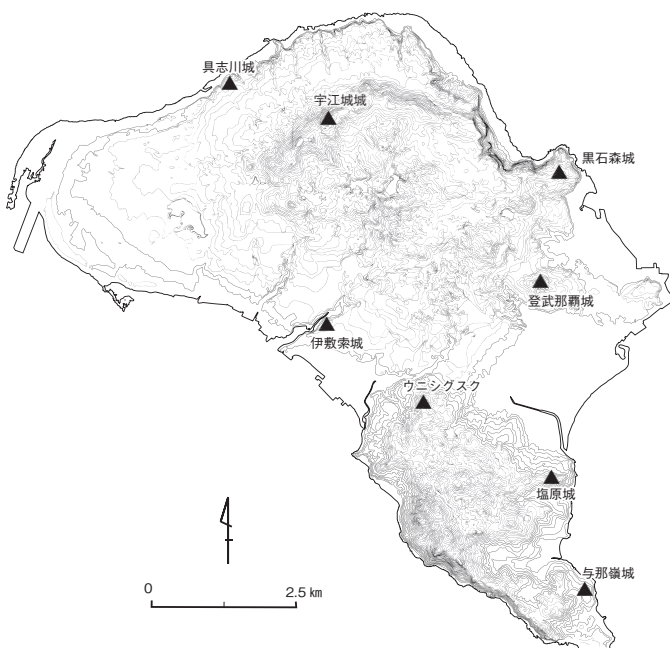
2007年、学生だった私は久米島町教育委員会文化財担当職員の協力で後輩二人と久米島のグスクの踏査を行いました。その時に初めて塩原城跡を踏査し、繁茂する草木やハブの怖さを感じながら、山頂までの険しい道のりを踏査したことを覚えています。それから三年後の2010年に久米島町

教育委員会の協力の下、塩原城跡の測量調査を後輩三人と共同で行うことができました。

報告については調査概要を『久米島博物館紀要』第12号に掲載していますが、本報告は鋭意作成中のため、以下に測量記録と踏査記録を記します。

塩原城跡は先学の成果により二重の石囲いをもつ城塞的機能を有するグスクとして知られていました。内側の石囲い内を「I之郭」、外側の石囲いと内側の石囲いの間を「II之郭」と便宜上呼び分けると、I之郭は約41m×29mの空間で、平面形はおおよそ長方形を呈します。石積みは人頭大から人胴大の安山岩で構成されており、I之郭の石囲いに沿うように内側に溝が掘られています。このことは、先学により排水施設として既に指摘されており、I之郭内を縦横に廻る溝状遺構が石囲いの沿いの溝に繋がります。測量調査において、溝状遺構の一部で列石や貼石が確認できたこと、郭内が北に向かって緩やかに傾斜していることから、先学の指摘の通り排水目的の溝であると推定できます。

II之郭は、I之郭の石囲いと外側の石囲いの間の空間で、石囲い間の距離は最長約43m、最短約11mとなっています。I之郭が比較的平坦に造成されていることは対照的に、本郭内の比高差は約8mあり、部分的に平坦面が存在するものの、全体としては傾斜がきつく建物の建造や住居などには適していないことは明らかです。郭内を区画してはいるものの、機能面については測量調査では明確にはできませんでした。また、前述の通り、塩原城跡は二重の石積みを有するグスクであると考えられてきましたが、測量調査の結果によりII之郭内に石積み状の遺構が存在することが確認できました。石積み状の遺構は、II之郭内を東端から西端まで、部分的に欠失しながらも続いており、東側はまばらに石材が散在します。石積みは南側から西側にかけては比較的良好に遺存しており、東側から続く石を追っていくと、これらに繋がっていくことが確認できます。特に南東側は良好に遺存しています。



▲遠景



▲石積み

短期間ではあるが三次にわたる塩原城跡の測量調査により、成果と課題について言及すると、成果の面では、I之郭とII之郭の間に廻っている石列がII之郭を通じて配石されていること、II之郭とよんでいる空間がいわゆる平坦面の造成による郭ではなく、郭全体が急傾斜していることから、恒常的な建造物が建てられるという空間利用は困難であったという推定ができます。

測量調査からの課題について、いくつかをあげると、II之郭内に配置された石列の機能に関して考察する必要があります。単なる土留としての配石なのか、あるいは空間の区画を意識した配石であるのかによって塩原城跡の縄張りの再検討が必要になります。また、石積みの構築過程や虎口の配置、溝状遺構の機能の検討など、今後検討していく必要があるのは明確です。

数あるグスクのなかでも塩原城跡は先学により縄張図が積極的に提示され、構造的には標識遺跡の一つとして扱われるほど、重要な遺跡ですが、依然として縄張図の提示に留まってしまうという状況です。今回、久米島町教育委員会の協力のもと測量調査を実施することができましたが、個人研究による調査のため、調査範囲が石囲いの範囲に留まってしまうこと、比較対象となるグスクも縄張図の提示で留まってしまうことから、課題は山積んでいます。まずはグスクの測量調査による一次資料の作成が急務で、最も重要な課題であると、筆者は考えています。

最後になりましたが、関西在住の筆者がグスクの測量調査を行えたことは、沖縄の文化財担当部局、考古学関係者のご理解とご協力のおかげが甚大で、測量調査を実施した四名の学生で現在作成中の報告書で成果を公表し、謝意を示したい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは千葉太郎さんです。

考 古学者の書棚

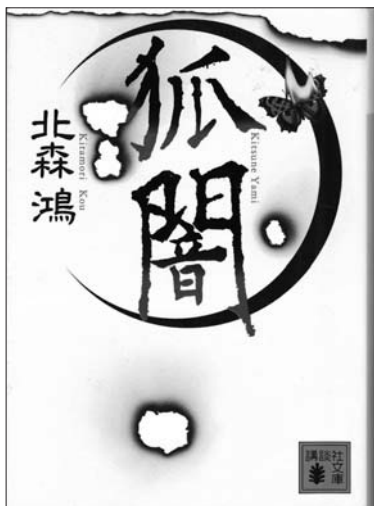
「狐闇」

北森 鴻／講談社文庫(2005)

植木 智子

この欄の趣旨からは少々逸脱してしまうかも知れないことを、まずはご容赦いただきたいと思う。現代物のミステリー小説である。

主人公は宇佐見陶子という。名前と一匹狼に近い立場をもじって、自ら冬狐堂を名乗る骨董業者である。確かな目利きには周囲も注目する、名うての旗師と設定されている。旗師というのは、固定した店舗を持たず、客や同業者の間を渡り歩く者たちを指す業界用語だという。商品である古物の主な



入手先は、各地で開催される競り市である。骨董業者というのは《古物営業法》に基づく《古物商許可証》の鑑札を得て初めて営業活動ができるのだそう。また、広域を移動する場合には《古物行商許可証》というのにも必要らしい。申請窓口が警察署生活安全課であるのは、銃火器刀剣類を商品として取り扱うし、盗品の売買に関わることもあることによる。同じ古物なのに、落とし物扱いの埋蔵文化財とはすいぶん違うものだ。競り市はこの鑑札を持つ業者のみが参加できる。高度な駆け引きの末、手に入れた品を顧客に販売する。また、地方の鄙びた骨董店で目敏く刀の鏢と根付の良品を見つけ、素人を装いつつもしっかりと値切り、都内の刀剣類専門店に高値で売りつけるといった転売の手口も描かれている。

街中の小さな骨董品店には、それは様々な物が雑然と置かれているのだが、店主たちにはそれぞれ得意分野があるという。絵画、陶磁器、宝飾品、仏像などジャンルは多岐にわたる。そして主人公の得意とするのは、文化財、出土品類という設定になっている。

本書のあらすじを簡単に記そう。

事件の発端は、顧客の一人から競りにかけられる二枚の青銅鏡の購入依頼であった。鎌倉期の海獣葡萄鏡の写しで、首尾よく競り落としたのだが、中の一枚が別物にすり替わっていた。三角縁神獣鏡にである。しかし、専門家はこれが青銅の塊を鑿で削り出した明治期の彫金の作品だと言う。また鏡にはある細工が施されていた。同業者からは明治初期の仁徳天皇陵盗掘事件に関わる品との情報が届けられる。謎多き鏡の真相を解明すべく動き出す冬狐堂。周囲で不審な血腥い事件が次々と起こる中、最後に見えてきたのは江戸から明治

にかけての政治的混乱と新政府が抱いた野望であった。その無謀な計画は現在も澱んだ地下水脈のように続いていて、計画達成のために不可欠な存在として製作された鏡は、歴史的事実とともに秘匿されなければならない物なのだった。

なぜ本書を取り上げたのかということ、古物としての文化財、またそれに関わる施設や研究者、専門家たちについての、少し違った角度から見た描写に興味を覚えるからである。私は正職員として勤務した経験はないが、博物館へはほとんど通用口から出入りする生活を続けてきた。館内は絶えず何かしらを抱えて足早に移動する場であり、展示室では展示品の傾きや安定を確かめ、解説パネルの誤字脱字に目を凝らす。たまに他所の企画展に行っても、見ているのは土器の口縁部だけだったりする。埋蔵文化財に関しては、鑑賞という行為はついでなかつたかもしれない。一方著者の観察眼は広角かつ細密で、的確に、優雅な文字列に置き換える。

著者北森鴻は、執筆にあたって徹底した取材を行うことで知られている。巻末には数冊の参考資料が列記されているが、実際には相当数の関連文献を読み込んでいるらしい。本書に登場する博物館内の閲覧室とおぼしき小部屋の殺風景具合、学芸員の無愛想な対応ぶりのくんだりなどは、どこを訪ねたのかは定かでないが実体験に基づく可能性が高く、内部を知る者としては少々気恥ずかしいような、こそばゆいような感覚である。また、主人公が手にする様々な古物や史跡の景観などの描写には、小説家の手にかかるとかく美しい表現になるのか、と随所で感心させられる。調査報告書や研究レポートに叙情を盛り込む必要はないのだが、ちょっとした形容詞の使い方などは一度拝借してみようかと思ってしまう小説なのである。

旗師冬狐堂はシリーズで短編集も含めて4冊刊行されている。いずれも事件に絡んで切子碗や白磁壺などが登場する。私がこれまでで少しか勉強してきた縄文の土偶や土製品を、もしも著者に見せたら取り上げてもらえるだろうか、どんなミステリーに仕上げられるだろうかなどと考えたりするが、続編はない。著者は先年、50歳を目前にして病没している。残念でならない。

アルカ通信 No.116

発行日 2013年5月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp